

12. 産前の授乳に対するイメージと産後の授乳体験の違いを 軽減させるための産前教育

○堀内 英子 (山梨赤十字病院 看護係長)

田中 みや子 (山梨赤十字病院 看護師長)

【研究目的】

新型コロナウイルス感染予防対策で、産前学級の中止や内容変更がされ、授乳の知識やイメージを持ってないまま産後を迎え戸惑うことも多い。そこで本研究では第一段階として、産後のスムーズな授乳行動につながるための知識や価値観、母親の潜在的ニーズや表在的ニーズを明らかにすることを目的とした。

【研究の必要性】

全国的に出生率が減少傾向にある中で、山梨県内 A 地域も同様に年々減少傾向にある。少子化、核家族化に伴い他者の育児を見ることも減り、我が子で初めて新生児に触れ、初めてのことを試行錯誤して取り組まなくてはならない。

産後の育児不安の原因に授乳の項目が多い¹⁾ことが報告されており、授乳に対する関わりが重要なことが示されている。産前教育では助産師や保健師が主体となって、主に出産や育児に対して工夫を凝らし集団形式の教室を開催している。女性のライフイベントとしても大きな経験となる出産は初産婦にとって緊張と不安の大きいものである。さらに 2020 年より COVID 感染が猛威を振るい、対面的関係が制限された社会生活の中で初めての育児を行う初産婦は、閉ざされた育児環境下に置かれていると言える。その初産婦に出産後のことをイメージさせ、行動させるためには、妊婦が興味・関心を持って、産後の自分をイメージして行動できる講義が必要である。計画的行動理論や社会的認知理論を組み入れて教育プログラムの開発をすることは、有効な産前教室が開催され、受講した妊婦が産後を迎えた際、イメージしてた授乳と大きくかけ離れず、過剰な不安を持つことなく授乳を行っていくことができると考える。

【研究計画】

〈研究方法・研究内容〉調査は自記式質問紙により行う。調査対象は山梨県内の出産施設 (3 施設) で妊婦健診を受け出産予定の初産婦とした。調査票は妊婦健診で受診の際に、手に取れるような場所への設置を依頼し、また、時間的余裕のある時は外来スタッフより直接、初産婦に協力依頼してくださることを確認した。その中で妊娠後期に調査票を手にとり承諾の得られた初産婦に対し、郵送またはメールにて回答を得る。また産後 2 週間頃、産後 1 か月頃に調査票を郵送し、郵送またはメールにて回答を得る。この調査では診療録の活用はせず、調査票にて授乳に対する考えや思い、授乳への知識を得た場所、授乳を行う妊婦 (褥婦) の周囲の状況や心情、授乳中の満足度などについて回答を求めた。授乳に対するイメージ、規範意識に対しては各質問 (表 3) に対し「1 点：全くあてはまらない」から「7 点：非常にあてはまる」のリッカート法にて回答を求めた。

〔倫理的配慮〕研究代表者が所属する病院において倫理審査の承認（承認番号：3-7）を受けて実施した。またB病院（承認番号：R3-25）、C病院（承認番号：2022-01）それぞれの倫理委員会の倫理審査の承認を受け、人を対象とした生命科学・医療研究に関する倫理指針（令和4年3月1日一部改正）に従い、説明文書を用いて研究の主旨、方法、守秘義務、個人情報取り扱い、研究協力への任意性及び中断の自由、結果の公表について説明した。また産後の疲労を考慮し、調査対象者に負担を掛けないよう配慮した。

【実施内容・結果】

1. 対象者

2022年4月～2022年9月までに調査票に回答した妊婦(褥婦)で、調査票回収率35.4%、対象者は40例中、産後1か月までの観察可能であった27例を研究対象とした。年齢平均31.63(±3.75 SD)歳、中央値32歳、最小27歳、最大38歳であった。有職者は20名(74.1%)、無職7名(25.9%)であった。

2. 出産前の授乳方法の希望

妊娠後期(妊娠34週以降)～出産前までに尋ねた。希望する産後の授乳方法では、できれば(できるだけ)母乳15名(55.6%)、混合(母乳+粉ミルク)12名(44.4%)であった。粉ミルクのみ、考えたことがないと答えた人はいなかった(表1)。

3. 出産前に授乳について知識や情報を得た場所や相手

最も多かった回答はインターネット・SNS19名(70.4%)であった。人からの情報では助産師・保健師、と友人11名(40.7%)が多く、次いで母・姉妹10名(37.0%)であった(表2)

表1：出産前に考える産後の希望授乳方法(複数回答) n=27

	n	%
母乳のみ	0	0.0
できれば(できるだけ)母乳	15	55.6
混合(母乳+粉ミルク)	12	44.4
粉ミルクのみ	0	0.0
どちらでも良い	2	7.4
考えことない	0	0.0

*2名が2項目を選択

表2：出産前に授乳について情報を得た場所や相手(複数回答) n=27

	n	%
インターネット・SNS	19	70.4
母子健康手帳・冊子	13	48.1
育児書	7	25.9
母親学級	4	14.8
助産師・保健師	11	40.7
友人	11	40.7
母・姉妹	10	37.0
義母・叔母・義姉妹	2	7.4
以前から知っていた	1	3.7

4. 授乳に対するイメージと規範意識

出産前に自分が授乳を行うことをイメージできているか「私は授乳を容易くできる」を尋ねた。「全くあてはまらない・あまりあてはまらない・あてはまらない」と回答した人は13名(48.1%)、「どちらともいえない」と回答した人が9名(33.3%)であった。「あてはまる・少しあてはまる」と答えた人は5名(18.5%)であった。授乳に対する規範意識を調べた質問では「私の周囲の人は私が母乳育児をすることを期待している」の質問では「少しあてはまる・あてはまる・非常にあてはまる」と答えた人は3名(11.1%)おり、「どちらともいえない」と回答した10名(37.0%)を含めると13名(48.1%)であった。「私の

周囲の人は私が母乳育児をすべきと思っている」の質問でも同数の結果であった。「私の周囲の人は私が母乳育児ができと思っている」では「少しあてはまる・あてはまる・非常にあてはまる」と答えた人は10名(37.0%)、「どちらともいえない」と回答した人は10名(37.0%)であり、双方を合わせると20名(74.1%)となった。

表3：授乳に対するイメージと規範意識の変化

n=27

	出産前 MD±SD	産後2週間頃 MD±SD	産後1か月頃 MD±SD
1) 私は授乳を容易くできる	3.26±1.43	4.11±1.74	4.11±1.58
	.074		
	.199		
2) 私が母乳育児を行うかどうかは、 私自身で決められることである	4.85±1.46	5.70±1.61	5.89±1.34
	.010		
	.016		
3) 私は自分で選んだ方法で、 授乳を行っていく自信がある	4.11±1.63	4.96±1.70	5.44±1.76
	.035		
	.829		
	.001		
4) 私の周囲の人は、私が母乳育児をすることを 期待している	3.11±1.60	3.93±1.98	3.48±1.87
	.098		
5) 私の周囲の人は、私が母乳育児をすべきと 思っている	3.00±1.69	3.59±2.08	3.00±2.11
	.101		
6) 私の周囲の人は、私が母乳育児ができると 思っている	4.11±1.42	4.33±1.69	4.56±1.40
	.250		

・friedmanの3群比較検定 両側<.05 ・各項目最低1点～最大7点

表4：妊娠中の希望授乳方法と産後の授乳方法と満足度

n=27

実際の授乳方法	満足度	出産前に希望していた授乳方法（複数回答）					
		できれば(できるだけ) 母乳		混合 (母乳+粉ミルク)		どちらでも良い	
		n=15	n=12	n=12	n=2	n=2	n=2
		産後2週間頃	産後1か月頃	産後2週間頃	産後1か月頃	産後2週間頃	産後1か月頃
母乳のみ	非常に満足・まあ満足	2 (13.3)	2 (13.3)				1 (50.0)
	どちらともいえない		1 (6.7)				
	あまり満足でない・満足でない						
混合：母乳が 中心で粉ミルク を少し追加	非常に満足・まあ満足	8 (53.3)	4 (26.7)	4 (33.3)	4 (33.3)	1 (50.0)	
	どちらともいえない		1 (6.7)		1 (8.3)		
	あまり満足でない・満足でない		1 (6.7)	1 (8.3)			1 (50.0)
混合：母乳が 少して粉ミルク が多め	非常に満足・まあ満足		1 (6.7)	4 (33.3)	1 (8.3)	1 (50.0)	
	どちらともいえない	1 (6.7)	2 (13.3)	2 (16.7)	3 (25.0)		
	あまり満足でない・満足でない	4 (26.7)	1 (6.7)	1 (8.3)	1 (8.3)		
	非常に満足・まあ満足		1 (6.7)		2 (16.7)		
粉ミルク	どちらともいえない						
	あまり満足でない・満足でない		1 (6.7)				

出産前から産後1か月まで得点の変化をみると、「私が母乳育児を行うかどうかは私自身で決められることである」は出産前得点4.85より産後2週間頃得点5.70と増加していた($p=.010$)。また産後1か月頃得点5.89であり、出産前得点との有意差が見られた($p=.016$)。「私は自分で選んだ方法で、授乳を行っていく自信がある」の項目も出産前の得点より、産後2週間頃($p=.035$)、産後1か月頃($p=.001$)と点数が増加していた(表3)。

出産前に希望していた授乳方法と、産後2週間頃、産後1か月頃の実際の授乳方法での満足度を見てみると、出産前に「できれば(できるだけ)母乳」を希望している人は、「混合(母乳+粉ミルク)」を希望していた人に比べて「母乳のみ」、「母乳が中心で粉ミルクを少し追加」の人の割合が多かった。出産前に「混合(母乳+粉ミルク)」を希望していた人の中に「母乳のみ」の授乳を行っている人はいなかった。また、授乳の満足度は産後1か月頃に比べて産後2週間頃の満足度の方が高い結果となった(表4)。

【考察と今後の課題】

〈授乳イメージ〉出産前に授乳のイメージを尋ねる「私は授乳を容易くできる」の質問で13名(48.1%)の約半数は授乳を容易くできると思っていないという結果となったことから、初産婦は出産前に、授乳ができるかどうか不安を抱いている可能性があること、授乳が簡単な育児技術ではないと感じているのではないかということが予測された。「私が母乳育児を行うかどうかは、私自身で決められることである」「私は自分の選んだ方法で、授乳を行っていく自信がある」の2項目において、出産前と産後2週間頃、出産前と産後1か月頃での有意差が示されている。初産婦にとって出産前の授乳のイメージは漠然としたものであるが、産後2週間頃、産後1か月頃までの授乳経験を通して、授乳方法を自分で選択し実施してきていること、自分が行っている授乳方法に自信を持ってきていることが示されている。出産前の授乳イメージをより具体的に持てる産前教育が臨まれる。

〈情報を得た場所や相手〉インターネット・SNSで授乳の情報を得たことのある人は70.4%であった。研究対象が20歳~30歳代のデジタルネイティブ世代であるためこのような結果となったと考える。インターネット上は玉石混交な上に、書いた人の勝手な思い込みがそのまま掲載されていることもあり、全てが正しいと思わずに目的をもって情報を得ていくことが臨まれる。助産師・保健師からの情報を得た人は40.7%であるが、妊娠中の保健相談時には授乳(母乳育児)についての指導を行っている。この結果から、指導内容を振り返る必要があり、指導技術の向上が臨まれる。

〈授乳に対するニーズ〉今回の結果では、「できれば(できるだけ)母乳」「混合(母乳+粉ミルク)」を希望している人が多かったが、対象者の70%が有職者であることも一つの理由であると予測された。また、濱田²⁾は初産婦の授乳と社会規範の関係を研究した中で、「大変な育児の中で「絶対」という考えは「母親」だけでなく子供にまで悪い影響を与える考え」を示しており「絶対」という考えを持つことは、母乳育児ができなかった場合に「母親」を落ち込ませ子どもに悪い影響を与えてしまうという、「母親」の精神状態が子どもに影響するという考えを初産婦が持っているとして述べており、そのような思いを持っていることも予測された。授乳の満足度には授乳にかかる時間や、授乳間隔など、授乳方法でない部分が影響していることも加味しなければならないと考える。

〈授乳に対する社会規範〉周囲の人から「母乳育児への期待」や「母乳を与えるべきもの」と感じるかを質問した3つの項目の結果から、初産婦は母乳育児に対して周囲の人の期待を少なからず感じていることが示唆された。母乳育児は「母乳は母親だけができる自然な行為」という母性愛神話が影響している³⁾と考えられた。しかし、今回の対象者は混合栄養希望者が多数であり、母乳は出産後のホルモンの働きによって分泌するが、個人が分泌を左右できるものではなく分泌増加時期や分泌量など個人差が大きく、母乳分泌量はかなり個人差があるという特徴を、情報として認知されているためと考えられた。産前教育で正確な情報共有が必要である。

〈今後の課題〉今回の研究では対象人数が少なかったため、今後もデータ収集を行えるよう働きかけていきたい。得られたデータ分析結果に基づき、第二段階としてプログラムの構築とプロセス評価を行い、社会的認知理論ならびに計画的行動理論に基づいた新しい授乳に関する産前教育プログラムを構築していきたい。

【研究の限界】

今回の研究では100件のデータ収集を予定していたが、COVID感染対策などによる様々な影響でリクルーティングが有効的に行えなかった。また縦断研究であり継続した調査を依頼したが、途中で途絶えてしまうこともあった。この調査は限られた地域での調査であること、データ数が少ないことにより、この結果を一般化することは難しい。

【引用・参考文献】

- 1) 塚田幸乃他：退院後から産後1か月健康診査までに母親が抱く授乳に対する困難感と対処行動.母性衛生.第57巻4号.709-717.2017
- 2) 濱田真由美：初産婦の授乳への意思に影響を与える社会規範.日本助産学会.VOL.26.,No.1,28-39,2012.
- 3) 大日向雅美：母性愛神話の罪.2002年10月30日.日本評論社.
- 4) 土田昭司・山川栄樹：新・社会調査のためのデータ分析入門-実証科学への招待.2011年7月.有斐閣.
- 5) 酒井麻衣子：SPSS完全活用法 データの入力と加工.2016年9月.東京図書株式会社
- 6) 石村友二郎著 石村貞夫監修：SPSSでやさしく学ぶ統計処理第7版.2021年12月.東京図書株式会社.
- 7) 阿部真人：データ分析に必須の知識・考え方 統計学入門.2022年1月.ソシム株式会社. 他

【経費使用明細】

使 途	金 額
アンケート用紙・返信用封筒・出生連絡はがき印刷代	107,110 円
通信費（切手・レターパック・はがき・保護シール・封筒代）	28,256 円
後納郵便代	3,195 円
データ記録用 USB	2,999 円
質問紙保管用鍵付きケース	2,680 円
謝礼 27 人分（ギフト券 ¥500×12・QUO カード¥530×15）	13,950 円
消耗品（クリップ・インク代・コピー用紙・クリアファイル他）	11,622 円
参考文献・参考書	35,620 円
挨拶・実施調整時の手土産	9,385 円

合 計	214,817 円
大同生命厚生事業団助成金	210,000 円